

公開研究発表会記録		分科会名	国語分科会
授業者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 白石 公德	発表者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 奈良岡恵美子
助言者	弘前大学教育学部 准教授 増田 貴人 氏	記録者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 松井麻佐江 弘前大学教育学部附属特別支援学校 天野 優美
発言者	発 言 概 要		
	<p>＜研究協議＞（○よかった点，●改善点）</p> <p>○相手意識と目的意識を持たせていた。</p> <p>○確認が丁寧であったため何をすべきか分かりやすかった。</p> <p>○ワークシートの記入欄を広くしたことが，活動のしやすさに繋がった。</p> <p>○他者評価があり，次への意欲につながった。</p> <p>○「みんなそれぞれ違うのが良いね」という言葉掛けが，また書こうという意欲付けになった。</p> <p>○Tが生徒のよいところを発見できていた。また，互いに認め合う雰囲気できていた。</p> <p>○今日のめあてを意識して発表しようとする姿が見られた。</p> <p>○生徒Bに対して発表の順番を変えた配慮がよかった。お助けボードがあったことで話すことはできなくても最後にあいさつができた。</p> <p>○掲示することで自分以外の作品を確認することができていた。</p> <p>○桃太郎だからこそ，たくさんの意見が出た。</p> <p>○ウォーミングアップがよかった。</p> <p>○一つ一つ明確で丁寧な指示がよかった。</p> <p>○Tが生徒とは別の視点から述べている点がよかった。</p> <p>●早口言葉を，擬態語等が入っている文にする，2・3種類やる，内容に迫る早口言葉にする等。</p> <p>●タイマーを使用し，時間を意識できるようにする。</p> <p>●物語全体をイメージして書いている生徒もいたため，絵の場面に限定してもよかった。</p> <p>●単元の中で物語のどこからどこまで扱っているのかが分かりにくかった。</p> <p>●話のよかったところは？と聞くと，ストーリーについてだけ話してしまうため，分かりやすかったところは？等発問の仕方を工夫するとよい。</p> <p>●擬音語の説明に時間が取られたので，展開に時間をとれるようにすればどうか。</p> <p>●文章を作った本人がどこに気を付けて書いたか等を話す場面があればよかった。</p> <p>●生徒B以外にも，書く場面や，ねらいからずれている生徒等への支援は必要なかったか。</p> <p>●発表が音声だけだったので，前に出たの発表や視覚教材も使えばよかった。</p>		
白石 (弘附特)	<p>・生徒Bについて。緊張しており，顔を伏せてしまった。「お助けボード」を出すタイミングが早かった。もっと考える時間を与えればよかった。アドバイスがほしい。</p> <p>(Bの実態について)</p> <p>・好きなことは，指パッチン，小学部の児童と遊ぶ。</p> <p>・同年代よりも年下とのやりとりを好む。</p> <p>・普段の授業は起きている。</p>		
	<p>・「あと1分」と言われて顔を上げた。完成させたいという意欲はあると思った。彼なりに頑張っていたと思う。</p> <p>・書く際に支援することとほっといて見守る場面の意図が感じられた。今のままでよい。</p>		
増田 (弘前大学)	<p>＜助言者から＞</p> <p>・全校研究の概要の中で，他の教科等のグループが言葉以外の表現をみているなか，国語グループは，言葉を扱うという教科の特性上，言葉による表現に直接的に焦点をあてることにな</p>		

る。国語という教科のなかで、非言語表現をどのくらい扱えるのか、全校研究との整合性の部分で難しいのでは、可能なのかと感じていた。ここまでよく仕立てた。よく頑張った。

- ・「ももたろう」の題材設定は意図として有り。発達心理学者のケース氏は、「認知の容量は限られているので、課題の理解と方略をどのように分配をするか」という研究がある。授業では取り組む課題を理解するだけでは不十分で、どう取り組むかという方略まで至ることが大切。課題をどう理解するかに容量を使うと、方略に使えなくなるので、今回は分かりやすい題材で生徒にとっては方略を考えやすかったと思う。
- ・選んだ絵が集合写真的であったため、桃が流れるところ、割れるところ等、比喻（どんぶらこ等）が出しやすい場面の絵がよかった。
- ・学習プロセスを分析して授業や教材をどう構成するか研究した教育学者のガニエ氏の「9つの教授事象」を紹介する。指導過程を、学びを支援するための外からの働きかけと捉えて、効果的な教材をつくれるか考えようとする枠組みである。

①学習者の注意を獲得する

…本時では、早口言葉を用いていた。

②目標を知らせる

…本時では、「小学生に分かりやすく話すために」というねらいがあった。

③前提条件を思い出させる

…今までの学習を今日どのように生かすかという観点。

本時では、「今まで～という学習をしてきたが…」というかたちで具体的には示されていなかった。

④新しい事項を提示する

…今日初めて〇〇に取り組むかという観点。

本時では、全く着手していないことはなかったが、ぼやけたかたちで提示していた。

⑤学習の指針を与える

…本時では、「今日は比喻を使って」というめあてに合わせて、生徒たちが発言していた。

⑥練習の機会を与える

…本時では、「おむすびころりん」の提示があり、うまく機能していた。よかった。

⑦フィードバック

…本時では、教師・生徒の相互評価ができていた。

⑧学習の成果を評価する

…今日の授業を踏まえて、「表現の幅が広がったかどうか」を生徒自身が感じることで、現時点での評価は難しい。

⑨保持と転移を高める

…いわゆる般化のこと。学んだことを他の場面で応用してできるか、学びを活かし持続できるか。これから分かってくる。

- ・上記の9つの学習プロセスのうち、③⑧⑨を除く6つが入っていた。よい授業だった。ただし④については生徒の認識が弱かったのではないと思われる。その拡充は今後の課題である。
- ・女生徒が発言した「ゆっくり」という表現が評価では消えていた。小学部にとっては、「大きく」「ゆっくり」も大切。意図とは違いうだろうが大事なことなので、授業からずれた内容でも取り上げればよかった。

公開研究発表会記録		分科会名	音楽分科会
授業者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 小枝 洋平	発表者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 小枝 洋平
助言者	弘前大学教育学部 教授 今田 匡彦 氏	記録者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 柏原 理紗 弘前大学教育学部附属特別支援学校 勘林 秀平
発言者	発 言 概 要		
	<研究協議>		
小枝 (弘附特)	・生徒に提示する楽器選びを失敗した。他の楽器の音を消す楽器を出さなかったが、もう少し選んでもいいと思った。		
成田 (弘附特)	・楽器を選ぶときの流れを変えたのがよかった。これまではP Cで指示を出したあとに自由に楽器を選ぶようにしていたが、そうすると周囲の音を聞けず、ガチャガチャと鳴らすだけだった。それから、P Cで一人ずつ楽器を選ぶよう指示を変えたところ、周りの音を聞くことができるようになった。		
栩内 (弘附特)	・インプットとアウトプットを繰り返すことで子どもたちが音を聞けるようになった。		
大里 (弘附小)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学生でも音を聞くことは難しい。今日は音をよく聞いている様子が見られた。教師が止めなくても終われる、強弱をつけられているのがよかった。音が鳴ってはいるが、うるさい感じがなく自然でよかった。また、音の強弱や輪唱などを楽しんでいた。 ・楽器の使い方がよかった。自由な演奏の中にも自然と楽器を正しく使っていたが、正しい楽器の使い方を教えたのか、経験からできているのか。 		
小枝・成田 (弘附特)	<p>→今回の提案授業では奏法も自由にしていて。自分としては正しく行わなくてもいいと思っている。むしろ壊してもいいくらいで考えていた。面白い使い方をすることで面白い音を出す子もいた。ただ、後期には正しい楽器の使い方を教える予定。</p> <p>→今回は音の楽しい組み合わせをメインに考えていた。楽器の強弱の工夫を。静かな音を聞く練習もよかった。それ以降子どもたちも変わった。</p> <p>→音のON・OFFの授業を年度初めに行っている。</p>		
栩内 (弘附特)	<ul style="list-style-type: none"> ・経験の積み重ねから静かにすることができている。 ・研究グループで楽器選びのときに面白い鳴らし方ができる楽器を選ぶようにした。高等部ではシーンとした状況で音を聞く練習をしたところ、子どもたちが周りの音に耳を傾けるようになった。 		
大里 (弘附小)	・先生が振り返って終わるだけなのが残念だった。振り返りがないと、活動をやらせっぱなしになりがち。深い学びを目指すなら振り返りをしたほうがよいのではないかな。楽しかった、満足など選ぶ形式でもいいので何かの形で返していく方がいい。返すことで深い学びになるのではないかな。		
小枝 (弘附特)	→言語的な振り返りよりも、次の時にどう音が変わったのかのほうの方が重要ではないかと思っている。		
大里 (弘附小)	・音の体験の中でしか出てこない言葉を大切にしようか。音楽を通したからこそ表現できる言葉もあるのではないかな。言葉、音のどちらでもいいが。		
小枝 (弘附特)	→あまり振り返りをやりすぎて国語的になるのを懸念し、行わなかった。		

今田 (弘前大学)	→音楽なので、言葉で「よかった」よりは次の音が良くなっていればいい。どちらがいいか分からないが、言葉で表現するときに先生のための言葉では意味がない。本当の気持ちで出てきた言葉なのか判断できるように。
前田 (弘大学生)	・指揮者と演奏者のコミュニケーションがとれていてよかった。笛、はじく楽器なども面白い。楽器のバリエーションの幅を広げることで音楽の幅が広がると思う。
小枝 (弘附特)	→笛の衛生面が心配で、使わなかった。
今田 (弘前大学)	<p>＜助言者から＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの創造性がフルに発揮された素晴らしい授業だった。 ・従来の音楽の授業は、教室のなかに仮想のステージ、仮想の観客を想定する〈劇場型の音楽〉を基盤として展開されてきた。所謂クラブ型学級合唱である。繁下、坪能、村尾（1998）等はこれらの音楽を〈ステージの音楽〉とした。坪能は更にドラマによる表現教育の提唱者ブライアン・ウェイを引用し、仮想の観客を想定することにより学校の音楽表現が人為的になる、と指摘する。合唱コンクール等に見られる不自然で過剰な表現が典型的な〈劇場型音楽〉のデメリットである。この〈劇場型音楽：ステージの音楽〉の対立概念として提唱されたのが〈広場の音楽〉である。〈広場の音楽〉とは「仮想された聴取を必要としない、自分達が自分達に向けて表現する〈自己充足的な音楽〉」（村尾 1998, p. 14）である。さらに、彼らの研究は、パターンミュージック、手作り楽器による音楽など、授業としての〈広場の音楽〉の構築を目指した。 ・〈広場の音楽〉の導入は、子どもたちの創造性を基盤とした音楽教育の在り方を特別支援学校から通常学校に向けて発信する可能性を孕む。音楽教育の成果として期待される汎用可能な創造性を〈身体活動〉をキーワードに構築することで〈広場の音楽〉を基盤とした特別支援学校での〈音楽授業〉の有効性が顕著なものとなる。 ・学習指導要領では、何が「音楽」を定義づけしていない（音楽を法的に規定することはできないので）。例えば小・中の指導要領で求められているのは子どもたちの〈創意工夫〉と〈協働〉であり、特別支援学校からの音楽の Universal Design の提唱が可能となる。 ・今回の提案授業では、サウンドウォークを鑑賞として採用し、この活動を基盤に子どもたちが創作を行った。創作表現には器楽と声（歌唱）が自然に含まれており、指導要領に示される〈表現〉と〈鑑賞〉各領域・分野の関連も無理なく消化されている。 <p>＜引用・参考文献＞</p> <p>繁下和雄・坪能由紀子・村尾忠廣（1998）「授業に〈広場の音楽〉をとりもどそう」『音楽教育学』第 27－4 号, pp. 13-24.</p>

公開研究発表会記録		分科会名	図画工作・美術分科会
授業者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 小林 泰子	発表者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 木村恵利子
助言者	弘前大学教育学部 教授 蝦名 敦子 氏	記録者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 今 夏希
発言者	発 言 概 要		
	<研究協議>		
塚本 (弘前大学)	<ul style="list-style-type: none"> ・制作に先生が手を出さないところはよいところだと思う？場合によるかな・・・。手を出してやって見せることで、そこから何かを掴んで制作に向かうこともある。 ・粘土の量が多い。手を使って造形するには扱いが難しいのかな。 		
岩井 (弘前大学)	<ul style="list-style-type: none"> ・適材適所ではないか。人によって持ちやすい量は違う。 		
塚本 (弘前大学)	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に粘土が何個必要か、個数を聞いてから渡していた。取りに来させてもよい。 		
岩井 (弘前大学)	<ul style="list-style-type: none"> ・ものは与えてはいけない。奪うというような価値観に。もの作りはハングリーでなければいけない。やりたくなるまでやらせないのが、本当は親切かもしれない。粘土は先生が介入してしまうと、先生のものになってしまう。粘土が先生である。先生は子どもが粘土とどう向き合うかを見守ることが大事。 ・身体で作る作業なので身体全体を使う。裸足になることで何かが変わる要素にもなる。動いている実感ももてる。「座る」から「立つ」に変わるだけで作品の見える位置が変わる。手で、目で作るのではない。 ・イメージが変わった時点で、それを受け入れる先生側の姿勢がよかった。 		
高安 (大学院)	<ul style="list-style-type: none"> ・題材の設定が子どもたちの実態や特性に応じたものになっていた。 ・この後、粘土の授業は行うのか。 		
小林 (弘附特)	<ul style="list-style-type: none"> ・今回はこれで終わるが、機会があれば。また、学年が変わって粘土に触れる機会はあるかなと考えている。 		
高安 (大学院)	<ul style="list-style-type: none"> ・丸める、道具を使うなど、スキルの的なものややっていくことで今後大きく高くに繋がっていくのではないかな。 ・子どもたち同士の学び合いを今後どう設定していくのか考えていく必要がある。今日授業を見た中でも、同じテーブルで制作していて交流している訳ではないが、お互いに作品を見ているなという場面があった。高くであれば、高さを競い合う場を設定してみるのもよい。それが次の作品作りに生かされていくのかなと感じた。 		
坂本 (教職大学院)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の最初でイメージをもたせたことで作品作りにスムーズに入ることができていた。 ・粘土が崩れてしまった子に対しての声掛けがよかった。子どもの考えを引き出す声掛けになっていた。 ・道具が途中から出てきたが、出すタイミングがよかった。 ・最後の振り返りを全員で行っているのがよかった。自分の頑張ったことと友達からの項目があり、表現力に繋がるのかなと感じた。ただ、子どもの席によっては作品のこだわったところが見えないところもあった。もっと近くで作品を見合うことができればよかった。 ・大きさ、高さの概念を身に付ける必要がある。 		
小泉 (教職大学院)	<ul style="list-style-type: none"> ・十分な量の粘土が準備されていてよかった。それを子どもに応じて使い分ける必要があることも分かった。 ・テーマからそれてしまっても、子どもたちの作りたい気持ちを尊重して、作品を大切にしているのがすごくよかった。 ・個別の配慮がしっかりされていた。 ・身近にある道具も活用できることに驚いた。いろんな道具を使うことで表現の広がりにつながっていると感じた。 ・制作時間が短かったのがもったいなかった。もっと時間があればどんな作品になっていたのか見てみたい。 		

<p>小林 (弘附特)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今日いただいた意見を今後の授業に生かしていきたい。教師側が感じて準備する粘土の量と子どもの手で感じる粘土の量の違いなど研究不足なところがたくさん見つかった。授業作りに関しては粘土に限らず共通する部分なので生かしていきたい。
<p>蝦名 (弘前大学)</p>	<p><助言者から></p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術の専門の先生、現場で活躍している先生、教職大学院で学んでいる方々が集まっているので、多様な視点からの指摘があり、有意義な協議会になった。 ・小・中・高校の教科教育である図工教育、美術教育では、図工・美術で大事な所を踏まえながら、教科の性質を生かした授業作りが必要となる。 ・今日の授業は、図工の本質的なところまでもつていこうとする意識の高い授業であった。 ・「大きく、高く作ろう」ということで、目の前にはこれまで他の子どもたちが作った、大きい高い作品がいっぱいあったが、最終的には、自分たちの表現になっていた。先生が一番考えたところは、「イメージ」をどうやって広げるか。大きい高いものを、まずは言葉で導入していた。次に「大きい高い」をどうやって表現できるか。ここから具体的な美術の方法の話になってくる。そこから同時に材料、素材の話になる。 ・材料を与えるときに、子どもに粘土の個数を聞いて渡していたが、子どもたちは自分が何を作るか、なぜ必要なのかよりも、数で聞かれているので数で答えている。作るものをどう意識させたらよいか、この辺について先ほど、校長先生、塚本先生から意見をいただいている。塚本先生からは、子どもが何かを作るときにの量としては、もしかしたらいっぱいの量を与えることは、造形としては考えた方がよいのではないかと。校長先生からは、触感、身体でどんどん作っていくには、ふんだんな量、素足になって歩くなど、どんどんやらせるとおもしろい作品ができる。この二つの視点というのは小学校になると、「造形遊び」と「表したいことを絵や立体、工作に表す」の二つのタイプの違う造形の関わり方として、はっきり提示されてくる。一緒にやると、曖昧な造形活動になってしまいがち。どちらかを意識して選んでやると、その能力を限られた時間で、一層突き詰められる。造形遊びの方は何を作るか始めに考えず、材料、場所、空間を使って活動によって造形を進める。今日の授業は、造形活動をさせるために、つなぐ、積むといった動詞を出していた。そういった部分では、造形遊び的な材料の扱いを踏まえているなと思った。最後何かを作る、焼くところまでもっていくなど、最終的な目的があって表現させるのであれば、自分が「何を」作りたいのか、ある程度のイメージを持たせて作らせていく。先生が子どもに付けてほしい能力に合わせて、多少なりとも意図的に方向付けをせざるを得ない部分があるが、そこを非常に柔軟な形でやった結果が、今日の授業の中での子どもたちの表現になったのかなと思う。もっと徹底すればよいという意見や、素材にもっと向き合わせた方がよいという考えなど常に様々ある。それは授業のめあてにも関わってくる。 ・これから求められている授業は、主体性や子ども同士の学び合い、何を学んだのかが分かる授業が目指されている。 ・学習指導要領の[共通事項]は、表現や鑑賞にも繋がり、小学校や中学校の図工・美術、特別支援教育にも共通して繋がっている項目である。

公開研究発表会記録		分科会名	体育・保健体育分科会
授業者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 中嶋 実樹	発表者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 加賀谷 紀
助言者	弘前大学教育学部 教授 本間 正行 氏	記録者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 鳥潟 昌也 弘前大学教育学部附属特別支援学校 榊 美香
発言者	発 言 概 要		
	<研究協議> (○よかった点, ●改善点)		
1 班	<p>○掲示物が分かりやすく見て分かる作りになっていて大変よかった。MTの動きや言葉掛けがよく、子どもたちが生き生きしていた。</p> <p>○シールや花丸、カードなど目に見える評価をしていてよかった。</p> <p>○児童の数が多くなると教師の指示が多くなりがちであるが、S Tが動きや指示の出し方が大変よかった。</p> <p>●小学部の発達段階では、児童が自己評価するのは難しく感じた。</p> <p>●ボールを取り行く際に、取り合いになって危なかったのも、ボールの数を増やしてもよいと感じた。</p> <p>●ビブスの大きさの調整が必要だと感じた。</p> <p>●「きつい」や「らくしょう」だけでなく、振り返りシートに楽しさを表現する項目があってもよいと思う。</p>		
2 班	<p>○MTが否定しない言葉掛けをしたり、褒めたりしながら授業を行っていたので大変よかった。児童同士で応援し合う姿が大変よかった。</p> <p>○目標シートとビブスの色を合わせていて分かりやすかった。</p> <p>○学習内容が提示されていて分かりやすかった。教師の雰囲気作りが良く、授業環境がとてもよく感じた。</p> <p>●時間の配分が気になった。もっとのびのびと活動する時間や評価の時間を設定してもよいと感じた。</p> <p>●評価は、花丸と三角の2つだけでなく、もっと具体的な評価にしてみてもどうか。</p>		
3 班	<p>○MTの児童の称賛の仕方やじっと待ったり、褒めたりする姿勢が素晴らしかった。</p> <p>○S Tとの役割分担がされていてとてもよかった。</p> <p>○素早くペアになる態度が素晴らしかった。普段の人間関係のよさを感じた。</p> <p>●導入部分で、ボールを取りに行くときに、一斉に取りに行かせていた。取り合いになる場面が見られたが、ルールを教えるなど何か意図はあったのか。</p> <p>●目標設定について。書いたことを自分で「表現する」ことや、目標を意識化させて活動する大切さを感じた。目標が自由ということで、自由という楽しさもあるが、本来体育的にねらう目標の体の動きについて、どこまでスキルを伸ばせるかが疑問だった。</p>		
中嶋 (弘附特)	<p>・ボールを一斉に取りに行った場面の意図は、子どもたちのやり取りが見られる。危険だが、ボールを取ってあげる児童がいたり、自分で取って種目に入る児童がいたり様々な様子が見られる。当初は、ボールを引っ張り合っていたが、ケンカが見られたりすることがあった。次第に「今日はこっちのボールが良い」と譲り合う場面が見られるようになった。ただ、今日はお客さんがたくさんいるということで、普段よりボールを取る時に勢いがあった。一気に取りに来て、ボールを取っているのが危険が伴うため、改善が必要だと感じた。</p>		
本間 (弘前大学)	<p>助言者から</p> <p>「表現」を引き出す支援方法について検討してきた。平成27・28年に動機付けにつながる支援方法を数値目標達成目標を入れたがあまりうまくいかなかった。今年度は、がんばるところを言語化したものを提供して自己目標として取り組むということで、具体的なものとしてバルシューレのドイツ系の運動学系のボール運動。それを段階的に題材として設定して、意欲的な動きにつながるのではないかと、技能も向上するのではと考える。指導案を見てみると、1つは時間いっぱい自分で考えて取り組む方法、楽しく取り組むためにと書いてあるが、どうしたら時間いっぱい自分で考えて取り組めるか、具体的な手立てがあまり見えてこなかった。技能の向上には、動きを具体的にイメージするために動きの言語化をしようというねらいが書いているが、流れを見てみると1つは意欲の側面と技能の向上がある。意欲的な取組は、1つはバルシューレを使っ</p>		

	<p>ている段階的な題材の設定によって、意欲的にできるのではないか、自分で考えて取り組む指導法と書いているが、どんな指導法を用いたのか見えてこない。技能の向上では動きの言語化、今回に関しては、目標値の設定ということで、言語を利用した。目標については、子どもたちの言葉の目標が書かれていた。</p> <p>少し話は逸れてしまうが、技能の向上に関して簡単に言うと「わかる」と「できる」の合体。認知心理学に則れば、言葉と言葉の出会いで技能が向上してくるという考え方。今回の技能の向上には、動きの言語化や目標値の設定というのは理屈は通る。しかし、目標値の設定をさせているが、振り返りがなかった。教師は評価しているが、子どもたちから出来栄えの評価がなかった。子どもたちは目標を言語で立てたが、振り返りがなかった。目的を書くというのは、認知心理学上の言葉の表現法の1種類である。活動した後の子どもたちの言葉が知りたかった。知的障害者の体育は、研究があまり見られない。資料に書いてある方向性は、だいぶ挑戦的で新しい取り組みが見えているが、まだ具体的に手立てとのつながりが希薄だったように思う。附属の公開研も教科的にやるのが久しぶりである。これを手掛かりにして、附属だけではなくて、特別支援の児童生徒のためにも、また改めて生活に返る指導だけではなくて、教科に則って深める授業で手立てをしてみると、何か成長するかもしれない。こういった捉えをもう少し続けていってほしいと期待している。</p> <p>課題は、特別支援の子どもたちは、個人差が大きいこと。今日の授業には6 学年全員いた。6 学年いると、発達状況にもずいぶん差があると思うので、そこで手立てが変わってくると思う。まだ明確になっていないので、授業を何度も繰り返すことで、低学年や高学年など学年に合った方法が今後出てくればいいと思う。</p> <p>他者の言語について。他者に言われたことが、自分の動きの向上に参考になることが多々あるため、その関係性に先ほどのボールを取りにいくことにも関係性がある。運動技能の向上にも他者との関係をやってみて、どのような効果が上がるかも今後知りたい課題である。まだまだ足がかりの提案だったと思うので、特別支援の児童の体育の発展に協力していただけたらと思う。</p>
--	--

公開研究発表会記録		分科会名	自立活動分科会
授業者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 白藤 剛	発表者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 谷地美奈子
助言者	弘前大学教育学部 准教授 天海 丈久 氏 弘前大学教育学部 講師 中山 忠政 氏	記録者	弘前大学教育学部附属特別支援学校 阿保 英人 弘前大学教育学部附属特別支援学校 寺嶋あさ美
発言者	発 言 概 要		
	<研究協議> (○良かった点, ●改善点)		
Aグループ	○映像機器の使用がよかった。その場ですぐ振り返りができる。 ○MTの生徒への目的意識, 見通しのもたせ方がよかった。 ●振り返りの場面での待ちの時間が多かった。→ワークシートの改善が必要ではないか。		
Bグループ	○話し方のポイントが生徒に伝わっていた。 ○どちらも成長を感じられた。 ○振り返り, ビデオの使用がよかった。 ●いい話し方悪い話し方についてはB君が迷っていた。もう少し明確化したほうがよかったのではないか。 ●評価の仕方について, 生徒が自分の言葉で表現する場面もあればよかったのではないか。		
Cグループ	○ビデオ 客観的に自分を見ることができるからよい。 ○MTのコメントの視点がしっかりしている。やる内容が明確化されていてよかった。 ○A, Bのお互いの改善点が見られてよかった。 ●映像を見る前にどこを意識してみたらよいのか, 見るポイントの確認が必要であったのではないか。		
中山 (弘前大学)	<助言者から> ・STとして授業に入ったので, 体験者として感じたことを話したい。 ・対象生徒の顔は何度か見たことがあるが, ほとんど触れ合いはなく, 見知らない人という設定で行った。 ・コミュニケーションは「間」が重要であると考えている。 ・アイコンタクトは, 相手をずっと見ているわけではなく, 時々, 視線を外しても成立している。また, 相づちなどの言葉以外の要素もコミュニケーションには大切である。 ・A君は「間」の取り方がうまくできていた。これまでの取組の積み重ねの成果が出てきている。 ・印象的だったのは, 話が盛り上がり, A君はどこで話を終息するのかと思っていたら, 一瞬, 最後の方に話を自分で引き取って話を終わらせた。うまい「間」の取り方だった。 ・上手な「間」の取り方は難しいが, できていたのではないか。学習の成果が般化されてきている。 ・職員室で教師に話し掛ける設定なので, 状況に応じた声の大きさも指導することが必要である。		
天海 (弘前大学)	1 提案授業について ・VTRによる振り返りを行い, 自己評価, 相互評価を丁寧に行っていることが評価できる。これらの実践は, メタ認知能力を高め, 言語活動の充実にもつながると思われる。自己評価と教員による評価もほぼ一致していたことから, 生徒は適切に自己評価を行い, 知識や技能を積み上げていることが予想される。 2 研究について ・豊かな表現を引き出すための支援の視点・内容を, 「相手に自分の気持ちなどを伝えようとすること」(主体), 「伝える手段の活用に関すること」(知識・技能), 「自己選択・自己決定に関すること」(主体, 思考・判断), 「分かりやすく伝える能力に関すること」(知識・技能)として		

研究に取り組んでいた。これらの4つの視点や内容をどのような経緯で設定したのかについては曖昧な点が多いが、結果的に自立活動グループでは、4つの視点や内容は評価の4観点に全て関連し、学力の3要素の中で重要視されている「思考力・判断力・表現力」に結びつくということが示唆されたと思われる。新しい学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の3つの柱として、①学びに向かう力人間性等（学びに向かう力人間性等）、②何を理解しているか、何ができるか（知識・技能）、③理解していること、できることをどう使うか（思考・判断・表現）が求められている。本研究の成果をもとに、実践研究を積み重ねていただくことを期待する。

3 知的障害教育における自立活動について

- ・知的障害のある児童生徒に対する自立活動の内容と各教科の内容との関係については、学習指導要領解説では、例えば国語科の「教師などの話し掛けに応じ、表情、身振り、音声や簡単な言葉で表現する。」ことの指導において、注意の集中が困難なために、特定の知識・技能等の習得に支障を来している場合には、課題の解決を図るための自立活動の指導を行うことなどが示されている。各教科等の目標、自立活動の目標を整理し、自立活動の指導を展開することが大切である。
- ・教育課程の編成に当たっては、子供の中心課題や基礎課題がどの各教科等の目標に該当するのかを明確にした上で各教科等を合わせた指導を展開することが大切である。また自立活動の指導においては、学習上や生活上の困難、行動上の問題等を整理し、健康の保持、心理的な安定、人間関係の形成、環境の把握、身体の動き、コミュニケーションの全ての区分からの検討を通して目標や内容を設定することが必要である。
- ・観点別学習状況の「思考・判断・表現」は、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、思考・判断した過程や結果について、言語活動を通じ児童生徒がどのように表出しているかを評価するものであり、各教科等において言語活動の充実を図った指導が求められている。
- ・「思考・判断・表現」は重要な観点であり、この力を育むためには、子供の願いを大切にしたい目標を設定し、言語能力や言語に代替する道具を活用する能力を子供の実態に応じて育てながら、その子なりの表現方法を伸ばしていくことが大切である。自立活動の区分でいえば、コミュニケーションだけに限ることではない。
- ・自立活動の指導は、目標が個々の子供により異なるため個別の指導が原則となるが、指導内容によっては、小集団での指導が効果的であることも考えられる。